

2025年3月総評 暮田真名

モザイクが外れてそこに海がある

大月陽星

わたしたちが目にする映像でモザイクをかけられているのは個人情報か、エロティックであったりグロテスクであったりして、「そのまま映してはいけない」とされているものだ。

「海がある」というのは拍子抜けのようで、海がきわめてセンシティブなものである可能性を「モザイク」が残していく。

判子が顔に顔が判子に

西尾日月

「顔が判子に判子が顔に」になる可能性もあったのだろうかと考えて、ない、と思った。

「判子が顔に」が「顔に判子が押された」というぎりぎり現実にあり得るイメージと結びつくからこそ、その後の「顔が判子に」（なる、吸い込まれていく）という景の驚きが大きくなるためだ。洗練された句。

水面を鏡のように磨いてよ

見ればなくなる淀川花火

小川 未優

拭い去られる鏡の汚れ、夜空を一瞬染めて消えていく花火、それが川の水面に映るさま、三層の映像が重なりあう。花火が消えるという自然の摂理に、川の表面を布で拭くイメージや、見なければなくならないという錯誤によって抗おうとしているかのようだ。

ジャージ登校がばれた先輩たちの

墓標だけざらざらと輝く

石井 友禅

この不思議さはなんだろう。おそらく中高生がする「ジャージ登校」と、「墓標」、つまりお墓に入るまでにかなりの時間的な距離があると感じられるためか。そのタイムラグを解消するために、尾崎豊的な天逝のきらめき、のようなものが錯覚として訪れる。

鈍行は後頭部で乗るものだろう

おかもと

「後頭部で鈍行に乗る」とはどういう状態なのかはまったくわからないが、「鈍」の文字と「後頭部」が並んでいると不穏だ、ということだけはぼんやりとわかる。「鈍」から「鈍器」や「鈍痛」など物騒な言葉を連想するからだろう。

あるあるを蔑むわれのゆく道を

麗かが断つ

ひとりでねむる

非銳理反

「あるあるを蔑むわれ」がユーモラスで、石川啄木のよう。暖かくなると桜が咲き人が集まる。お花見などベタ中のベタなので、「われ」にとっては耐え難いだろう。一喝して追い払う、などはせずにすごすごと家に帰って眠るところも憎めない。

正解の音をください

なにもかも

手から溢れて残らない夜

にわ

テレビやYouTubeのクイズ番組で流れる「ピンポーン！」という「正解の音」。聞こえたそばから消えてしまうという意味で赤ペンでもらうマルよりも刹那的で、それもまた「残らない」のではないか。なぜだろう、冬の風景のような気がする。

青空を言語化すれば飴細工

平松 泥沸

「横綱を言葉で言うと桜桃忌」（川合大祐）のオマージュか。「青空」から「飴細工」への飛躍は十分に効果的。飴細工は質量としてはスカスカで、どちらかといえば雲に似ていて、青空とは似ても似つかない。「言語化」という言葉の胡散臭さへの感度。

きみの手紙手捏ねの光ありがとう

池田 彩乃

「手捏ね」に目を奪われた。この句を見るまで、「手紙」は「紙」に比重のある言葉だと思っていたが、といえば「手」なのだった。なるべく折り目などがつかないよう慎重に触るのではなく、指紋がつくのも厭わず捏ねるという表現に、手紙の内容も想像できる気がする。

幽霊のまちにはびこる風船語

高遠みかみ

「風船語」という造語が見事。割れやすく、中身が空っぽで、手を離した瞬間にふわふわと上空へ飛び立ってしまう言葉。いかにも約束事をするのに不向きそうで、幽霊の街に蔓延していてもおかしくないなと思わされる。幽霊と風船には、地に足がついていないという共通点もあるし。